

新編 文学は可能か

奥野健男

新編文学は可能か

奥野健男

冬樹社

新編 文学は可能か

定価 一〇〇〇円

昭和四十五年五月十五日 第一刷

著者 奥野健男

発行者 高橋直良

発行所 冬樹社

東京都千代田区神田神保町二の一八
電話 (二六四)〇三四六
郵便番号 一〇一 振替東京七七五七

印刷所 広研印刷株式会社
製本所 一重製本株式会社

新編 文学は可能か 目次

	I	
		純文学は可能か……………9
		大江健三郎の文学と性……………26
		島尾敏雄の文学と夢……………43
	II	
		「家庭」の崩壊と文学の意味……………63
		「家庭」文学の逆襲……………82
	III	
		「政治と文学」理論の破産……………93
		「政治的文学」批判……………115
		「政治と文学」再論……………142
		『美しい星』論……………152
		篠田一士氏のディレッタント的批評に答える……………169
		武井昭夫氏の批判に答える……………176
		付「政治と文学」論争関係文献……………184

IV

「戦後派」文学批判	191
無頼派と戦後派の断絶	208
「戦後派」文学の方法	225
東洋的全体小説	245

V

性文学の質的転換	263
快感原則による文学	280
深層意識と言語	298
リアリズムを超えて	314
旧版あとがき	338
新版あとがき	340
六〇年代批評における奥野健男	342

磯田光一

新編 文学は可能か

I

純文学は可能か

昭和三十年に、服部達が『現代人の疎外』という評論を書いている。現代における人間の疎外を、(一)職業の分業化による疎外、(二)資本主義体制に原因する疎外、(三)技術の発達にもとづく疎外、(四)社会のメカニズムの強化による疎外、(五)歴史的偶然(事故の過剰)にもとづく疎外、(六)過度の機能化のため存在の自己同一性から逸脱することによる疎外、の六つの形式に分類し、その相互の関係を明快に論じている。なかならず(五)(六)の部分は、服部の独創的な分析がみられ、現在にいたるまでの疎外を論じた多くの文章の中で、もっとも示唆にとむすぐれたエッセイだとぼくは考える。

その(五)(六)の部分は後に触れるが、ぼくが服部の昔のエッセイを思い出したのは、彼がそのエッセイの枕として述べている次の文章のためである。

「わたしは以前から、ごく素朴な見方からして、文学者ないし芸術家というものを、今日の職能社会のなかでもっとも幸福な人間なりと見なしている。それは、以下のごとき理由にもとづく。

今日われわれが生きている環境は、多かれ少かれ職能的な社会、つまりそのなかで個人の果す役割が分業化されている社会である。言いかえれば、個人の社会的な存在理由は、彼が専門とする、何らかの特殊な技術的能力に拠っている。そして技術というものは、与えられた状況の總体のなかから或る特殊な部分のみを選び出す、という操作を必要とするものであると同時に、同様な種類の操作を、その技術に關与する人間に対してもまた、要求する。従って、今日の社会にあつては、個人は、彼自身の全体ではなく部分によつて代表されることになる。(中略)

しかし芸術家にあつては、彼のなしたことは、結局のところ彼が欲したことである。(中略)もつとも基本的な意味で、彼はおのれの作品に、従つてその作品を創り出すに至るおのれの行為に、責任をとることができる。彼の行為は全人的な行為である。もし芸術の市場における彼の地位が、つまりしくはあるにせよ、独立した生計を営むことができるだけの金銭を、その時折の作品に対する報酬として彼に供与することができるなら、彼はこの世でもつとも幸福な人間の一人であると言ねばなるまい。彼は、おのれの全人的な行為をそのまま職業的行為としてゐる。つまり、職業という今日の人間をその所属する社会に結びつけるもつとも基本的な絆において、彼は完全な人間であることができるからである。芸術家の眼から見れば、(少しの自慢も誇張もなしに) おのれの職業以外のあらゆる職業は、その幸福さの程度において、せいぜいきわめて稀な場合にのみおのれの職業に匹敵するものであり、大部分の場合にはそれよりはるかに下回っているものとして映る。(中略) 彼(註・芸術家以外の者)が關与するものは、全体ではなく部分である。(中略)われわれが人間的と名づけることのできるのは、対象の全体についてであつて、部分についてではないからだ」

あの何事についても懐疑的であり、ペシミストで、皮肉屋であつた服部達が、芸術家、文学者に對しては何と素朴な美しい憧れと自負を抱いていたであらうか。文学者だけは現代の人間疎外の状況の中で全人的に生き得る唯一の幸福な職業であると、彼は確信していたのだ。現実の個々の文学者が全人的であるなどと服部は思つていなかったらうが、少くともそういう幻想——いや基本的にはそうある筈だという理想像を心に抱き得る場所にいたのだ。ちなみに服部達が八ヶ岳山中で自殺したのは、一九五六年——『太陽の季節』が芥川賞になつた翌年の一月一日の夜であつた。

服部達の死はつい昨日のような気がする。だが今日服部のように、おのれは全人的な仕事を行なつてゐる、もっとも幸福な職業にいと何のやましさもなく堂々と言い切れる文学者はいるであらうか。「サラリーマンやほかの職業にくらべればまだ幸福さ」という、たかだか相対的な幸福感により現状に満足してゐる通俗文学者がいるぐらいのものであらう。少しでも文学者とは何かとおのれに問うたことのある者なら、文学者はかくあらねばならぬ、かくあるべきだという像と、現実のおのれの姿との隔絶に、いらだたざるを得ないだらう。全人的な行為であらねばならぬ文学にたずさわりながらそれができないおのれを、もっとも不幸な職業の人間と考へてゐるに違ひない。

現在の文学者の姿は、皮肉にも服部が「文学者にくらべればその幸福さははるかに下回つてゐるもの」とした文学者以外の職業の規定にそっくりりあてはまる。「状況の総体の中から特殊な部分のみを選び出す操作を必要とする」という技術者への規定は、状況の総体の中から、セックス、女、家庭、幼少時の思い出、限られた職業上の交友、酒場などの消費社会という特殊な部分のみを選び

出して描くより能がない、純文学者に、「彼が専門とする、何らかの特殊な技術的能力に拠っている」という規定は、推理小説（それも社会派とか本格派とか）、メカニズム内幕小説（それも産業スパイとか、何とかの黒い部分とか）、経済小説、劍豪小説、ハードボイルド的アクション小説、シヨート・シヨート、SF、エロ小説、痴漢小説、メロドラマ、ノン・フィクションの実話小説等々、マス・コミからその特殊な技術能力により書くものを規定される流行作家にあてはまる。そしてその結果、「彼自身の全体ではなく、部分によつて」小説や評論を書き商売している文学者——それはどうても全人的な幸福な職業と言うことはできない。文学者も今や現代の人間疎外の中に埋没し、全体で参画できず、部分のみが利用される特殊技能者になつてしまつたのだ。文学者は、おのれの書く小説や評論の中からさえ、自己疎外されている。とすれば現在において、文学者ぐらい辛い、苦しい職業はないということになる。本来ならばもつとも人間的であり、状況の総体を描く、というよりその状況の本質をとらえ、作品の中に世界を再構築すべき文学者が、疎外状況の中に埋まり、状況の本質を見抜くことができなくなつたのだ。

ぼく自身もかつて服部の言うように、文学者、芸術家を、もつとも幸福な職業と憧れていた。その頃会社づとめの技術者を本業としていたぼくは、技術者では人間の真のよるこびも満足感も生き甲斐も得られないと考へていた。技術者は、ぼくらの前にある現実の、限られたごく僅かの、それは総体の一兆分の一という程度の微小な特殊部分にしか参加できぬ。しかも自分の中の、ある限られた専門技能という部分でしか、自分の能力を発揮することができない。これではまるでおれは機械の一歯車でしかない。武田泰淳の『史記の世界』の言葉ではないが、自分は世界全体を考えたい。

世界全体の中に、自分の全能力をぶつけたい、と願った。そういう仕事を行なうことのできる職業として文学者、芸術家を考えていたのだ。

しかし今は文学者という職業より技術者という職業の方が、まだしも幸福な職業と言えるのではないかと考える。世界の総体など気にせず、その限られた特殊な部分だけを対象にし、専門技術という自己の中の部分だけを働かす。けれどそこには、たとえ限られた部分でも、対象との確実な接触感が保たれ、ひとつひとつ成果がたしかめられ、ささやかであろうとも何かをこのおれが動かし、たという人間的な満足感を得られる。疎外状況の中に深く埋もれていても、その仕事の即物的な確実さにより、本来の人間性回復の手がかりを感じる事ができる。

ところが今日の文学者は、そのような実体をつかむことができない。世界の総体をとらえる、状況の本質をつかまえるという使命感、目的意識はあっても、具体的な手がかりは何もないのだ。正体不明の巨大な虚体を前にして、むなしくたたずみ、いらだっているだけだ。文学者の内部世界に、世界の全体像はイメージを結ばない。霧が深く、本質を見抜くことができない。挑みかかりたくても敵の所在がはっきりしない。現代の疎外状況下では、文学は世界と人間の関係を、統一的全体的に表現することができなくなったのか。

少くとも現在われわれの置かれている状況は、今までの文学者が経験したことのない奇妙な状況であることは確かだ。社会の一部を、その中のある人間たちを描けば、そのまま社会全体を、普遍的な人間像をとらえることにつながる、その背後に世界の姿が浮び上る、つまり部分によって全体

を把握できるという、リアリズムを基調とする十九世紀的な本格ロマンへの素朴な信仰は、とうに地を払ってしまったから久しいが、それでも戦後しばらくの間は何らかの方法で世界や人間の全体をとらえることができるのではないかという希望はあった。ところが全体と部分との断絶の認識は、時とともに深まって行くばかりである。現代の多様な断片をパノラマ的にいくつつなぎ合わせても、また多様な部分を同時的重層的に新方法で表現しても、決して現代の社会の全体像は浮びあがって来ぬ。部分を集めれば集めるほどかえって全体像は遠ざかる。ことによると部分と全体とは全く無縁なのではないかとさえ思われて来た。

現代の特徴をもっともよくあらわしていると思われる政治や風俗や事件や切実なテーマ、つまりアクチュアリテイを作品の中に導入しようとする、どういふわけか必ずその作品の芸術性、主体性、自立性が損われてしまう。作品としてひとつの独立世界を形成し得なくなる。

その例は枚挙に暇がないが、現代のもっとも切実なテーマを扱い、世界像を浮び上らせようと苦闘している作家、堀田善衛の『零より数えて』のさんたんたる世界がその象徴である。

武田泰淳の『花と花輪』、安部公房の戯曲『石の語る日』、大江健三郎の『遅れてきた青年』をあげてもよい。これらはぼくのもっとも期待している作家なのだ。その他の新人やその周辺の文学的実力のない作家の作品については言わぬ。まして風俗や現象だけを追っている通俗作家については。また作中の主人公の行動や思想を、その人間の内部世界の必然性と、外部の現実社会の必然性との両面から描こうとすると、必ずチグハグなものになってしまふ。そういう作品は外部の現実社会に反応して動く人間を、内側からつじつまを合わそうとした無理な努力があらわになるか、読者に